

ア！安全・快適街づくりニュース

2013年6月 vol.19 2012.7-13.6 総集編



仲川に 相応 風景
平成25年元旦

枝垂れ柳
夕暮れ
霞の群を
小舟が
魚育ち
寺流
お丁葉
葉が
癒した
風景
書名
印

目次

□ 安心・快適街づくりのこれまでとこれから	石川金治	1
□ 3・11から2年 被災地と新小岩を繋ぐ, 世界へ繋ぐ	加藤孝明	3
□ 24年度の活動結果について	宇賀俊夫	4
□ 「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」に携わって土肥英生		8
□ 広域ゼロメートル市街地に安全・快適に住み続けることの意味や価値	中村 仁	8
□ 「葛飾区新小岩地区ゼロメートル市街地協議会」への評価	葛飾区	9
□ 「新小岩北地区安全・快適まちづくり輪中会議」設立趣旨		10
□ 輪中会議に思うこと	百瀬敏明	11
□ 輪中会議で学ぶ	竹本利昭	12
□ 輪中会議を通じてできること	菅野 二郎	13
□ 3・23シンポジウム in 足立		14
□ シンポジウムに参加して	小山 茂	15
□ シンポジウムと「天サイ!まなぶくん」	千葉久美子	15
□ 3・23シンポジウム会場ショット	古川修	16
□ 東日本大震災から2年 南三陸町訪問	石川金治・渡邊喜代美	17
—被災経験の共有と交流の報告—		
□ 南三陸訪問の写真	古川修	20
□ 南三陸町を訪ねて	宇賀 俊夫	21
□ 葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会と南三陸町の交流	鈴木庸介	22
□ 南三陸、石巻市訪問記	山上忠	24
□ 復興に向けた思い	成戸寿彦	25
□ 南三陸を視察して	青柳 勇	26
□ 支援から連携へ	渡邊喜代美	27
□ 経験の交流 in 東大		28
□ 9・9水防訓練		29
□ 松上小学校 出前授業「安全で快適な街を」～小学生からの提案～	塩崎由人	30
□ 24年度葛飾区協働事業	増澤一郎	31
□ 会員活動 市民防災まちづくり塾の活動	高田 信一	32
□ 関東大震災90周年・首都防災ウイーク 2013・9・1～8	木谷正道	33
□ 新会員横顔	船山 吉久	34
□ 洪水に備えて 改定版紹介		34
□ ホームページがリニューアルしました	古川修	35
□ お知らせ掲示板		36

安心・快適街づくりのこれまでとこれから

特定非営利活動法人「ア！安全・快適街づくり」
理事長 石川 金治

10年ひと昔と言いますが、私達のNPOの立ち上げは平成14年ですから、新しい「ひと昔」に向かって歩き始めたこととなります。節目のこの時期に、今までの活動を振り返り、これからの方向性についてみんなで考え、より高く羽ばたきたいと思います。

最初の活動は事務所前に立つ水位表示板です。アパート経営する人から「住人が転居して商売にならなくなる」とか「地域のイメージを悪くする」と言う意見もありましたが、「3階以上の避難を考える切っ掛けになる」と言う考えが浸透して、葛飾区全域に広がり、江戸川区や国交省も続き、水位表示はたちまち全国に普及しました。今では「水位表示板」発祥の地と自負しています。これが発展して「天さい！まなぶくん」が生まれ、これからの活躍が期待されています。

次の活動はピクニックを兼ねた海浜公園でのゴムボート乗船訓練です。一旦浸水するとひと月も水上生活を強いられるので、ボートは不可欠ですが、1艘もないので、副会長が寄付されました。これを見て区はボートの必要性を理解して、各学校や町会に配備しました。これが発展して、エンジン付きの大型ボートを備える町会、プールで乗船訓練をする学校、消防・警察の協力を得て組み立て・操船・乗船訓練を大規模に行った新小岩北連合町会などが出現しました。これからも町会ごとの活動や、時には全町会を挙げての活動が期待されます。

三つ目は避難の基本である「自助・共助・公助」の普及です。この地域の避難場所は松戸方面と決められているので、実際に避難して問題点を明らかにしました。共助訓練として、町会ごとに集団となって、駅前に集合しました。僅か150人で駅前広場は一杯です。先を急ぐ気の立った人たちが万単位でここに集まったら、そこで惨事が起きそうです。乗換駅での長い地下通路は、足の痛い年寄りと一緒に歩けず落後するので、その対策が必要です。素晴らしいヒントもありました。それは、広場に着いたとき町会ごとに町会旗を立てると、後から避難し

た人たちの目印になるという発見です。また、長期の避難に備えて、健康管理用の楽しく誰でもできる体操や、趣味や特技で避難生活をいやす工夫などです。

このような問題点を行政も把握しており、遠距離避難の在り方などを加藤先生を中心とした専門家に検討を依頼しています。避難者収容と言うハードな面だけでなく、避難行動時や避難生活を健康に過ごすというソフト面を含めて、加藤先生の研究成果に期待しましょう。

四つ目はシンポジウムです。第1回15年11月のシンポジウムは我々の活動が行政に「弓を引く」活動ではなく、行政ではできないことを「補完する」活動であることを役人にアピールし、同時に町会の人に安心感をあたえる目的で開催しました。第2回17年11月のシンポは、この地域は葛飾・江戸川両区に跨っていることを意識して開催しました。即ち、住民が水害と言う一つの事案について考える時、両区と別々に打ち合わせる必要があり二度手間となる。NPO主催のシンポならば、両区長と一緒に招くことができ、我々にとって効率的であると同時に、両区にとっても他区の事情が分かり有意義であると考えました。また、運命共同体である輪中住民の共通行動規範として、町会のみならず多様な主体の参加を呼び掛ける「新小岩宣言」を発しました。第3回平成24年3月のシンポは今まで疎遠であった足立区へのPRと次に述べる輪中会議の集大成として開催しました。

五つ目は、輪中会議です。今までは町会中心に活動してきました。一旦水害が発生すれば、新小岩地域は運命共同体ですから、「新小岩宣言1」の四項で歌い上げたようにすべてのステークホルダーが協力して水害に取り組むことが求められており、輪中会議はそれを実現させる良い方法です。また、この会議は誰でも自由に参加でき、又自由に発言でき、更にその意見を話し合いの中で集約できるという民主的な場であり、住民の意識を高める有効な手段でもあります。しかし、そこで纏められた意見、例えば既存建物だけでは避難者を収容できないので高台が必要であるという意見がまとまったとしても、この「輪中会議の総意」が輪中に住む「全員の総意」と断じることにはできません。そこで、前項のシンポを開いて広く賛同者を得たり、高台設置に当たり関係する住民に対しては、さらにきめ細かい対応したりする、色々な対策が必要です。今後この対策を進めたいと考えています。

3・11 から2年:被災地と新小岩を繋ぐ, 世界へ繋ぐ.

理事 加藤孝明 (東京大学生産技術研究所)

早いもので3・11の未曾有の大震災から2年が経った。復興事業の期限は5年とされており、その半分を迎えようとしていることになる。「遅れる復興」という新聞見出しにみるように、復興期限に照らせば、復興の歩みは遅々としていると言える。一方で、被災から二年経ち、仮設住宅での暮らしがある意味当たり前の風景となりつつある中で、やっと、復興の意味、復興の方向性について根本から考えられるようになる時期を迎えたとも見える。

詳細は割愛するが、今回の震災からの復興の体制と進め方は、多くの問題を含む。被災の様相、そして今の時代感に合わないしくみを無理に当てはめているといった感である。一言でいうと、非常に「不自由」な感じである。今、被災地では、この不自由さを乗り越えて、市民、そしてコミュニティが故郷のより良い復興の実現を目指して熱い議論を交わしている。復興に定石はない。きっとこの議論と活動が「新しい地域づくりの」モデルの創出につながり、被災地の明るい未来を拓くに違いない。

私たちが被災地から学ぶことは多い。新小岩北地区輪中会議では、3月初旬の南三陸町訪問、下旬の新小岩北地区での南三陸町民との意見交換会、それに引き続くシンポジウムを開催し、被災コミュニティの生の実態を理解、共有した。巨大な自然の力を経験した人ならではの達観、被災コミュニティの故郷への熱い思い、現状を打開しようとする大きな力に大いなる感銘を受けた。新小岩北地区の次の動きにつながるすばらしいきっかけとなるにちがいない。

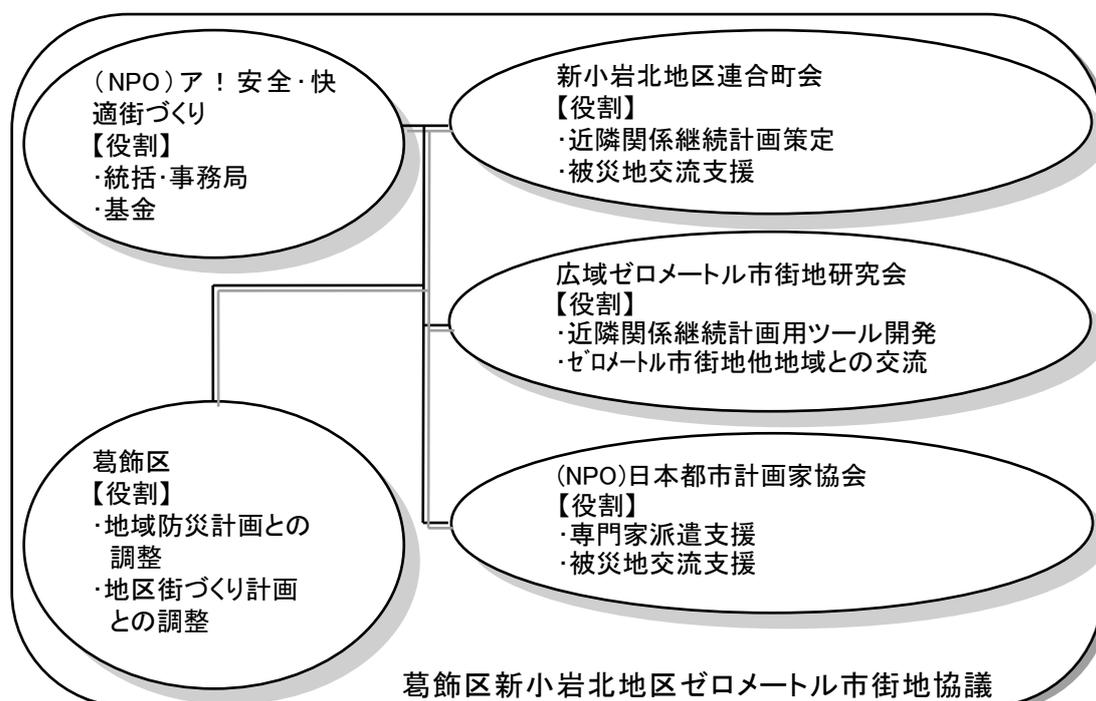
いくつか南三陸町で聞いた印象に残る言葉を紹介したい。「『人間は自然の中で生かされているという当たり前の事実』に改めて気づかされた」。「津波ですべてを失ったとしても、歴史や文化が無くなったわけではない」。コミュニティの、そして地域住民の底力が故郷をより良くする原動力であること、自然と人間の生活の関係を考えることの重要性、地域の文化の大切さ、そしてそれを育み、それを継承することの大切さ、いずれも世界共通であろう。

24年度の活動結果について

24年度の当NPOの活動結果についてご報告いたします。
この年は主に次の三つの事業に取り組んできました。

■第1の事業/葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会の設立と活動

◆ **協議会の設立** まず第1の事業は23年度以来東京都の「新しい公共支援事業」から助成を受けて2年にわたり活動をおこなっている「新小岩北地区輪中まちづくり事業」です。これは当NPOが葛飾区役所、新小岩北地区連合町会、広域ゼロメートル市街地研究会、NPO日本都市計画家協会と一緒に結成した「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」（以下「協議会」と略す）をベースに活動を行ってきた事業です。



◆ **情報の共有・発信のツール開発** 24年度には前年度に検討を重ねそのコンセプトを固めた「近隣関係継続計画（LCCP）を支えるツールの開発」を行いました。このツールは震災時に緊急避難を行うための情報の伝達・共有が担保できるように、携帯とモバイルパソコンを活用した情報の共有・発信のツールです。

早速、洪水時に自分たちの街の浸水状況を疑似体験できるアプリ「天サイ！まなぶくん」がインストールされたモバイルパソコン、i-padを持って町会の皆さんや中学生の皆さんに街歩きを行ってもらい、洪水の疑似体験をすると共に、避難場所や避難経路についての学習を実施して好評を博しました。



◆ **学生たちとともに学ぶ** この他本年度は、新小岩学園や上平井中学の理科部の生徒を対象に防災に関する出前講座や、ワークショップなども実施しました。



講義風景

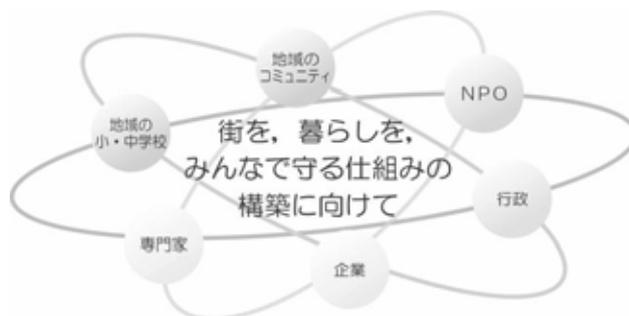


理科部の学生たちが「天サイ！まなぶくん」を使って意見交換

◆ **輪中会議の立ち上げ** 「協議会」の次の活動は「輪中会議」を立ち上げたことです。東日本大震災でも見られるように災害時には地域の力が欠かせません。地域の力を合わせることで快適な街を、暮らしを大規模な災害から守ることができるのです。そのためにはできるだけ多くの方に安全・快適街づくりの輪に加わっていただくことが重要です。そこで、地域の様々な分野で活動する皆さんに対等な立場で参加していただき、皆で問題を共有し、これまでの経験から得た知見を分かち合い、学びあい、知恵を出し合い、安全・快適な街づくりを考えていく場として、輪中会議を立ち上げることにしたのです。2012年8月29日に地域の各種団体の代表を招いて、趣旨説明の会を開いたのち、9月23日に第1回の輪中会議を開催し、地域の置かれている現状と課題について町会の方に報告いただくと共に、「持ち寄りの共助」をテーマに意見交換を行いました。その後も3回の会議を重ねるとともに輪中会議立ち上げを広く紹介することと、南三陸の方から被災体験と直面する課題について伺うことを主眼としたシンポジウムを開催したのです。



円卓会議の会場風景



◆ **交流・支援・連携活動** 「協議会」の活動では新しい取り組みとして被災地との交流・支援活動も実施しました。

被災地としては当初石巻市との交流を考えていましたが地域が広大であり、市全域ではなくそのうちの一地域との交流とならざるを得ないため、一つの自治体全体がつかめるようなコンパクトな地域との交流が望ましいとして、会員がすでに2年にわたり活動をしていた南三陸町と交流することにし、25年3月9、10日に「協議会」のメンバー21名が被災地を訪問、現地の現況と被災経験を聴取すると共に、復興に当たって直面する課題は何か、それを乗り越えるためには何が必要かに

ついて討議しました。



海沿いの水門や橋桁。手前は町の跡・・・



復興まちづくり構想を語る真弓さん



仮設の役場の玄関先での訪問メンバー同



被災後の仕事を語る阿部館長

その結果を踏まえて3月23日に開催したシンポジウムに南三陸町から4名の方を講師として招き、南三陸町の現状と被災生活で得た経験、被災生活の中での助け合いについて報告していただきました。来場者からは被災地の方の経験について生の声が聞けて大変有益だったとの感想を得ています。

◆ **3区連携でシンポジウム** 足立区、葛飾区、江戸川区、三区の住民を対象に3月23日、足立区東京芸儒センター・天空劇場で350名の聴衆を集めて開催されました。テーマは「大規模災害に備えて街を、暮らしを、みんなでどう守るか～東日本大震災の経験を共有し、広域ゼロメートル地域の備え方を考える～」というもので、コーディネーターに東京大学生産技術研究所の加藤先生と、NHK「ニュースウォッチ9」のキャスターであり、多くの東北被災地を訪れている大越健介氏を迎えて行われました。近藤足立区長の挨拶の後、第1部「広域ゼロメートル市街地の現状とこれから」では、足立、葛飾、江戸川区の住民代表による取り組みの報告とトークセッションを、第2部「南三陸からの報告」では南三陸町からの4名のゲストによる同地域の現状と被災生活で得た経験、被災生活の中での助け合いの報告とトークセッションが、第3部のまとめでは二人のコーディネーターに来賓の波多野荒川下流河川事務所長が加わり、被災時の共助の重要性をかみしめつつ、常日頃からいざという時に備えて避難方法、避難場所を各人が考えておくこと、そのために現在「協議会」が推進している輪中会議の手法を各区に広め、それを通じて地域住民の防災意識の高揚を図っていくことが重要との結論となりました。





上左：シンポジウム出演者一同、上右：壇上風景、下左：会場風景、下右：南三陸からのゲストと大越さん、加藤さん

■ 第2の事業/葛飾区との協働事業です。

◆ **地域の学校と協働** 今回の協働事業では新小岩学園の小学校5、6年生と中学校1、2年生を対象に芝浦工大の中村教授が講演を行い、地域の置かれている危険性について理解を深めたいと、災害発生時の避難方法について親子で話し合うことを主眼としたアンケートを実施しました。その結果、各家庭の事情に応じた避難方法が明確になり、学校の対処方法に役立つ情報を得ることが出来ました。

◆ **区役所でパネル展示** この他、葛飾区役所で2週間にわたり「大水害と東日本大震災における避難」をテーマにパネル展示を行い、来場者へのアンケート調査も実施しました。

■ **第3の事業/新小岩北地区連合町会が東京都の地域の底力再生事業から助成を受けて実施した事業をその企画・申請・実行・報告まで全面的に支援・連携したことです。**

◆ **9/9 町会連携避難訓練** この事業ではまず9月9日に地元の消防署の指導の下、上平井水門北側の中川で各町会所有のゴムボートと小・中学校に区が配備した組み立て式ボートを使った避難訓練を行ないました。特に組み立て式ボートについては本番に先だって9月2日に新小岩学園で各町会ごとに組み立て訓練を繰り返し実施したことが、本番でのスムーズな組み立てに役立ちました。

◆ **浸水マップの作製・配布** この他この事業では荒川が洪水になった時の浸水想定図を基に自分の家がどのくらい浸水するのか、そのとき手近な3階以上の高台はどこかを記入して家の中の見やすいところに貼っておくための浸水マップを作製、各戸に配布しました。

◆ **「天サイ！まなぶくん」で待ち歩き** 協議会で開発された浸水状況を疑似体験できるアプリ「天サイ！まなぶくん」をインストールしたiPadを持って町会の皆さんに五つの方向に分かれて街歩きワークショップで、自分の住む町が洪水時にどのくらい浸水するかを調べる行事も行いました。

上述のような活動を行って成果を上げました。輪中会議など25年度にも継続して実施し、加えて新しい事業も展開して、引き続き皆様方と協働していきたいと考えています。

2013年6月10日

NPO ア！安全・快適街づくり

活動報告作成 事務局長：宇賀 俊夫

「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」に携わって

理事 土肥英生

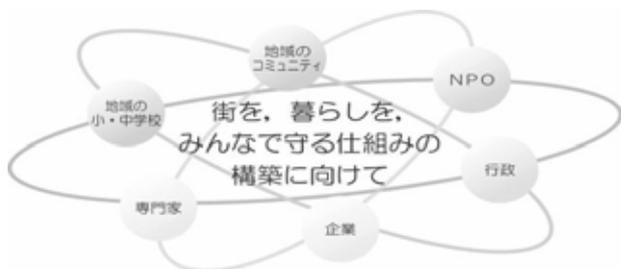
(NPO 日本都市計画家協会 理事・事務局長)

葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会の活動を通じて、東京都新しい公共支援事業の支援を受け、ゼロメートル市街地における、安全・安心まちづくりに向け、地域の様々なステークホルダーの参加する輪中会議の立ち上げを行うことができたことは、高く評価できる。

平成 24 年度から、大阪市では、全市域で連合町内会ベースの地域活動協議会の立ち上げを進め、これに係っているが、行政やコーディネータの総力を結集しても、実態の伴った活動を立ち上げられているところは限られている。

葛飾区新小岩北地区のように、ゼロメートル市街地の大規模水害対策に焦点を併せたテーマ性の高い円卓会議は、全国でも特筆すべき取り組みである。

今後、立ち上げた円卓会議が、活動主体となるメンバーの多様性を保ちつつ、地域の減災まちづくりのマネージメントを担うことのできる組織として、いかに資金・人材の確保を図るかチャレンジを進めることに貢献していきたい。



広域ゼロメートル市街地に安全・快適に住み続けることの意味や価値

理事 中村 仁

(芝浦工業大学教授)

2013 年 3 月 23 日に開催されたシンポジウム「大規模災害に備えて街を、暮らしを、みんなでもどう守るか～東日本大震災の経験を共有し、広域ゼロメートル市街地での備え方を考える～」は、大変刺激的であった。

特に印象に残っているのは、南三陸町の後藤一磨氏（波伝谷仮設住宅、宮城大学復興まちづくり推進員）の以下の発言である。「3.11 以降、防災という言葉がよく使われています。ただし、自然災害そのものを防げない以上、命を守るためにどう動くか、人災をいかに小さくできるか、それが自然災害における防災だと思っています。自然条件を含めて自分が住んでいる地域がこういった地域かということ、住む人が普段から意識しているかどうかがすごく重要なのだと思います。極端な話をしますが、東京のゼロメートル市街地のような地域に、都市集中というかたちで住むことが果たしていいのか。そういう住み方、暮らし方も含めて今回の震災を機に根本的に見直していくことが、今最も必要なことなのではないでしょうか。」

この後藤氏の発言を受けて、広域ゼロメートル市街地に安全・快適に住み続けることの意味や価値をあらためて再認識していくことの重要性を感じた次第である。

「葛飾区新小岩地区ゼロメートル市街地協議会」への評価

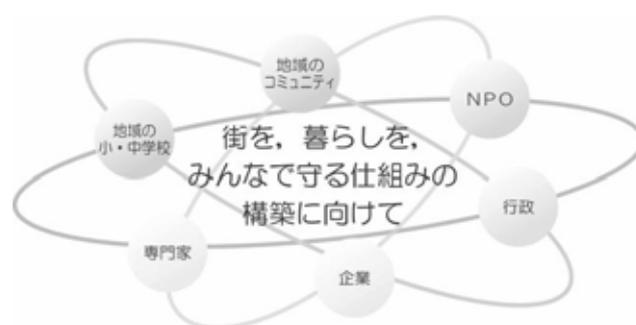
葛飾区

平成23年度に地元の町会や、NPO法人、学識経験者、専門家及び区の5団体で設置された「葛飾区新小岩地区ゼロメートル市街地協議会」において取り組んだ、シンポジウム「大規模災害に備えて 街を、暮らしを、みんなでどう守るか」などは、地域の方々が改めて大規模水害時の危機意識を高めるうえで、大変有意義な事業であったことと思います。

新小岩北地区では、この事業の取り組み前より数年間にわたり、NPOや学識経験者などが中心となり大規模水害に備えるための様々な活動を進めてきたとのことですが、「協議会」を設置し取り組んだ事業により、さらに、安全で快適なまちづくり活動を地域全体に浸透させていくことができたことと思います。

この新小岩北地区での取り組みを葛飾区全体、そして多くのゼロメートル市街地を抱える自治体へと広げていくには、これまでの取り組みや成果を区やNPO、学識経験者などが連携し、広く広報していくとともに、この事業を継続していくことが重要であると考えております。

その意味でも、地域防災力向上に向けた取り組みとして、さらに互いの団体が連携を強化し、取り組みが発展していくことを切に願います。

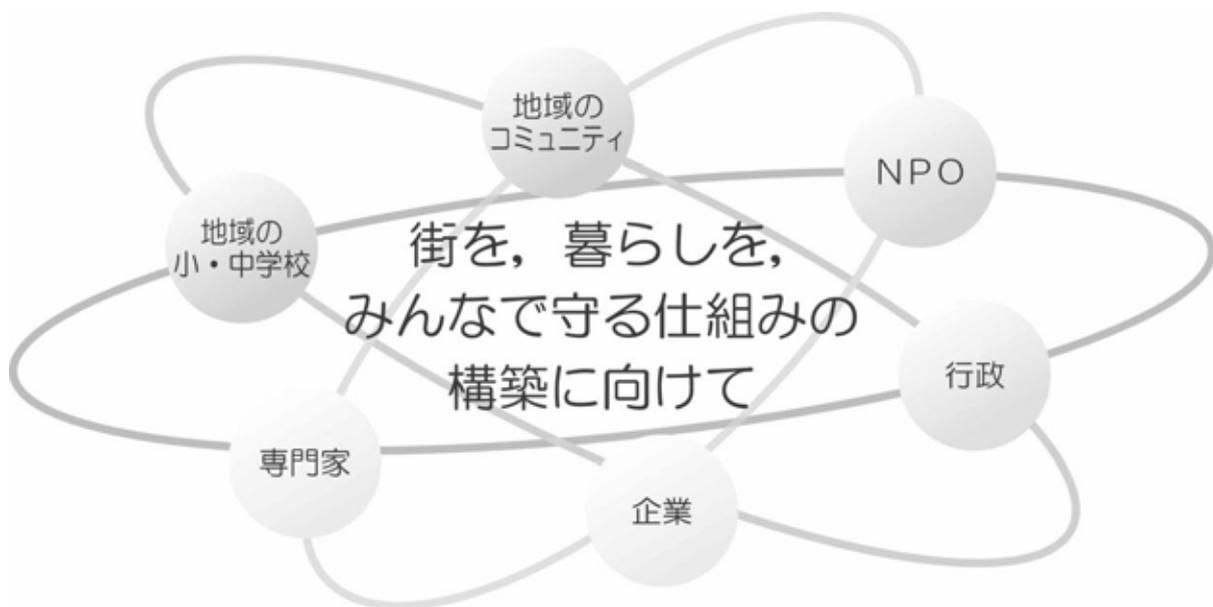


新小岩北地区 安全・快適まちづくり^{わじゅうかいぎ} 輪中会議 設立趣旨

東京東部は地盤沈下により海より低い海拔ゼロメートル地帯となっています。堤防が決壊した場合、大変な状況となることが予想されています。東日本大震災でもみられるように災害時には地域の力が欠かせません。地域の力を合わせることによって快適な街を、暮らしを大規模災害から守ることができると考えています。そのためには、できるだけ多くの方に安全・快適まちづくりの輪に加わっていただくことが重要だと考えています。

新小岩北地区では、これまで数年間にわたって町会、NPO、大学研究者が中心となって大規模水害に備えるための様々な活動をすすめてきました。今年度からは、これまでの関係者を中心に「新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会*」を組織し、これまで進めてきた安全・快適まちづくり活動を地域全体に広げ、かつ、発展させる場として「新小岩北地区安全・快適まちづくり輪中会議」を立ち上げることにしました。

「安全・快適まちづくり輪中会議」は、地域で活動する様々な方々に対等な立場で参加していただき、皆で問題意識を共有し、これまでの経験から得た知見を分かちあい、学びあい、知恵を出し合い、より良い新小岩北地区を考えていく場と位置づけています。



* 新小岩北地区連合町会・葛飾区・NPO ア！安全・快適街づくり・広域ゼロメートル市街地研究会・NPO 日本都市計画家協会が構成されています。

* なお、この活動は「東京都新しい公共支援事業」の助成を受けています。

輪中会議に思うこと

“町会の活性化！その中に減災活動あり”

東新小岩七丁目町会

百瀬 敏明

初めて輪中会議に参加したときは、参加者が有識者の方々、地元地域の方々、中学生など多彩な顔触れであることに驚くとともに、会議が「安全・安心・快適な街づくり」を目指して、その都度、テーマを決めて様々な意見を出し合い、まとめていくと言うものであり、私には、地域で実施している減災活動の知識しかないため、どのように対応していけばよいのか不安でした。

情報発信・新たな情報収集・そして活動の質を高めること 今まで我が町会での減災活動は、似通った意見の持ち主が集まったの活動、情報不足の中での活動のため、ややもすると「井の中の蛙」状態になってしまい、活動のマンネリ化、自己満足な活動に進んでしまう恐れがありましたが、平成24年に東京防災隣組に認定されてからは、自分たちの減災活動を情報発信することで新たな情報収集ができることを学んできました。

そのため輪中会議に参加しているうちに、この会議が私たちの活動に適合していると感じるようになりました。それは会議の中で自らの活動報告を行い、参加者から様々な意見をいただくことで減災活動の方向性に間違いの有無が確認でき、さらに新たに得た知識を活動に取り込むことで活動の計画、実行、確認、対処(PDCA)を回して、活動の質を高めることができるためです。

コミュニケーションを大切に信頼関係を築くこと 私は、当町会が推進する減災活動と輪中会議で推進している「安全・安心・快適な街づくり」との接点は、次の点にあると考えます。

1. いくら高度な減災活動を計画しても参加者不在では意味がない
2. 高齢者社会の中で、災害時の要介護者支援活動の必要性を感じていますが、だれが援助するのか
3. 隣近所のコミュニケーション不足の中で、災害時に何ができるのか

以上のことから、災害に強い街づくりを推進するためには、この地域が安全・安心で住んでいて快適であると感じていただける街にすることが大切であり、そのためには、住人とのコミュニケーションを大切に信頼関係を築くことだと考えます。

隣近所が協力し合える環境をつくること 当町会では、当町会の減災標語である「減災は隣家三尺」をもとに、災害時には隣近所が協力し合える環境作りを推進して行きます。

今年度は、「現代の狼煙」と名付けて「紅白の旗を利用した隣近所での安否確認」ができる仕組みを計画しています。私たちの活動目標は「安全・安心で快適な街づくり」を目指した町会の活性化であり、その中に減災活動があると考えます。

これからも輪中会議にて減災活動報告をすることで「安全・安心で快適な街づくり」のアドバイスをいただきたいと考えています。

輪中会議で学ぶ

“地域住民が主体的に継続的に活動する事で
地域文化となり地域の誇になる”

東新小岩七丁目市民消防隊隊長 竹本利昭

輪中会議。初めてこの言葉を聞いた時、何の事だかよく理解出来なかった。

研究者、行政、NPO、そして地域の住民たちで知恵を出し合い、討議する事で大規模災害、特に水害に対しての減災に繋げていくという話を聞いても、水害など考えた事も無く、ましてやそれに備える必要性も感じていない状態だった私には、イメージする事が出来なかったのだ。

初めての会議でその危険性を聞いても、会議を終え帰宅する道すがら、これだけ堅牢な堤防に守られたこの地域が水害に遭うなんて事は無いと思っていた。しかし、二度、三度と会議に出席し、具体的な被害の想定を学ぶにつれ、未だ発生していない今このときにこそ考えなくてはいけない問題であると認識したのである。

私の立場は地域住民、この問題の主たる人間として何が出来るか、何をすべきかを真剣に考えた時、可能な活動として地域自治町会に所属し、災害発生時の現場対応の先鋒を担う一員として知識の習得、技術の向上を目指していこうという考えに至った。

考え得る様々な想定をしても人智など軽く凌駕してしまう自然の力に、ただ恐れるだけではなく少しでも被害を減らす努力を続けていきたいと思う。

我々、地域住民が主体的にそして継続的に活動する事で地域文化となり、地域の誇りになるのではないだろうか。その為のコアとして輪中会議の重要性を今では重く感じている。

想定外などと言う逃げ口上は使いたくない。

輪中会議を通してできること

“学び感じたことを如何に学校や保護者の皆さんに還元できるか”

二上小学校PTA会長 荳野 二郎

輪中会議に参加させていただくようになってから、まだ1年経過していませんが、その間色々な取り組みに参加をし、その都度勉強させていただいています。輪中会議の中で加藤先生が「ここには様々なコミュニティの方が参加していますが、大切なのはここに参加の皆さんがここで学んだこと、感じとことを自分が所属するコミュニティに如何に還元していくかということです。」ということ常々仰っていました。私は地元小学校のPTAに所属しておりますから、私が学び、感じたことを如何に学校や保護者の皆さんに還元できるかということを考えるようになりました。

PTAは子供たちが通う学校と子供たちが生活する地域とを結びパイプ役であると思っています。防災という観点で言えば、この地域と学校と保護者（PTA）ががっちり連携を取ることが子供たちの生命を守るために、地域を守るために必要なことであると思っています。

そこでまず取り組んだのが、保護者の皆さんへの語り掛けです。保護者の方の大多数はこの輪中会議というものの存在すら知らないと思います。立場上、保護者の方の前でお話しをする事がありますので、その際に輪中会議に参加したこと、そこで得た知識等を少しずつですが提供するようにしました。そのことで少しでも保護者の皆さんに防災について考えるきっかけになればと思っています。

次に行ったことは子供たちへの働き掛けです。防災というテーマですと、子供たちと直接話しをすることは難しいですし、興味を持ってくれることも難しいと思っていました。ちょうどi-Padアプリの「天サイ！まなぶくん」のリリースが決まり、どこかで使ってみないかというお話しが会議の席上でありましたので、チャンスだと思い、PTA主催の「ふたかみこどもまつり」の際にi-Padをお借りして、子供たちに使わせていただきました。当日は操作説明のために輪中会議メンバーの皆様にもお手伝いをいただき、感謝しております。東新小岩7丁目町会にご協力いただいた救助ボートの乗船体験と併せ、おかげさまで、200名近い子供たちに体験してもらえたのではないかと思います。

今後もこうした活動を通じて自分の所属するコミュニティへ還元することにより、「災害に強い地域づくり」に参加していきたいと思っています。

大規模災害に備えて 街を，暮らしを，みんなはどう守るか

～東日本大震災の経験を共有し，広域ゼロメートル市街地での備え方を考える～

日時：2013年3月23日（土）13：30～16：45（開場13：00）

場所：東京芸術センター 天空劇場※（参加費無料，申込み不要）
（収容人数400名 先着優先）

※（住所）東京都足立区千住1-4-1 21・22階（ホームページ）<http://www.art-center.jp/tokyo/>
（交通アクセス）JR・東京メトロ・東武「北千住駅」より徒歩7分 京成「千住大橋」より徒歩10分

本シンポジウムでは，広域ゼロメートル市街地（海水面より低い地域に広がる市街地）にある足立区・葛飾区・江戸川区の現状を共有するとともに，南三陸町からゲストを迎え，東日本大震災の経験を共有します。そして，広域ゼロメートル市街地における大規模災害への備え方を考えていきます。

トークセッションのコーディネーターには，

「NHKニュースウォッチ9」キャスター・大越健介氏を迎えます！



NHKニュースウォッチ9
キャスター
大越 健介 氏

プログラム概要（敬称略）

司会：齊藤真弓（社会福祉法人 清遊の家 うらら保育園 園長）

- 開会挨拶：石川金治（葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会 会長）
- 来賓挨拶：近藤やよい（足立区長）

第一部 広域ゼロメートル市街地の現状とこれから

- 広域ゼロメートル市街地の現状：加藤孝明（東京大学生産技術研究所 准教授）
- 足立区における取り組み：渋谷良治（千住仲町まちづくり協議会 会長）
石渡良昌（千住仲町まちづくり協議会 熟年いきいき部会 部会長）
- 葛飾区における取り組み：中川榮久（葛飾区東新小岩七丁目 町会長）
中村隆三（上平井中学校3年生，東日本PEET緊急救援チーム少年団長）
- 江戸川区における取り組み：土屋信行（公益財団法人 えどがわ環境財団 理事長）
- トークセッション コーディネーター：大越健介，加藤孝明

第二部 被災生活の経験を共有する

- 南三陸町の現状：小野寺寛（南三陸町 すばらしい歌津をつくる協議会 会長）
後藤一磨（南三陸町 波伝谷仮設住宅，宮城大学復興まちづくり推進員）
- 被災生活で得た経験：佐藤徳郎（南三陸町 中瀬町仮設住宅自治会長）
- 被災生活の中での助け合い：内海明美（南三陸町 田尻畑仮設住宅自治町会長）
- トークセッション コーディネーター：大越健介，加藤孝明

第三部 まとめ

主催：“街を，暮らしを，みんなはどう守るか”を考える 実行委員会（事務局：葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会）

共催：足立区

後援：葛飾区，江戸川区，東京大学生産技術研究所 都市基盤安全工学国際研究センター，
NPO 法人ア！安全・快適街づくり，新小岩北地区連合町会，広域ゼロメートル市街地研究会，
NPO 法人日本都市計画家協会，国土交通省荒川下流河川事務所，東京都建設局

本シンポジウムは，東京都・新しい公共支援事業の助成対象事業「新小岩北地区輪中まちづくり事業」の一環として行うものです。
問い合わせ先：zeromercity@gmail.com（“街を，暮らしを，みんなはどう守るか”を考える 実行委員会 事務局）

2013・3・23 シンポジウムに参加して

小山 茂
都立広尾病院 内視鏡センター長

この度、石川金治様からのお誘いでシンポジウム『大規模災害に備えて街を、暮らしを、みんなでどう守るか』に参加させていただきました。以前亀有に一時期住んでいたことがあり、久しぶりに訪れる懐かしい界隈でした。

しかし私自身恥かしながら、広域ゼロメートル市街地に関する知識はほとんどなく、第一部の現状紹介だけでも新鮮な驚きを感じました。加えて水害発災時の被害想定は十分深刻な内容でした。しかしその対策を日常の取り組みにつなげようと努力されている演者の方々が、あくまで前向きだったのは非常に印象的でした。地元の代表から若い世代に思いを伝え、繋げてゆく有様も頼もしく感じました。

客席のあちこちで住民の方々が熱のこもったディスカッションを展開するのを目にし、地元の関心の高さも実感できました。

それが東日本大震災の経験談になると場内は静まりかえり、ブラウン管では伝わらない肉声の臨場感に圧倒されました。大越キャスターが絶句されたのも無理からぬことです。第一部は比較的なごやかなムードでしたが、第二部で南三陸町の方々からお伝えいただいた実感をわが事としてとらえる時、そのギャップを頭の中で整理するのに手こずりました。

都立広尾病院は東京 23 区の広域基幹災害医療センターとして災害時の対応を日頃から検討し実践しております。私も 1986 年の伊豆大島噴火や 1995 年の地下鉄サリン事件、そして一昨年の震災などを通して災害医療に関わり、都心部直下型

震災時のマニュアル作成にも携わってきました。今後はこのような大規模水害にも準備する必要性を感じました。

終了後、天空劇場から見下ろす町並みが開始前と違って見えたのは、夕暮れ時のためではなかったようでした。北千住駅に向かう折、昔と変わらない午後 5 時の放送を耳にしながら、この地域がいつまでも変わらない風情でいてほしいと祈らずにいられませんでした。

大変勉強になりました。心より感謝申し上げます。

シンポジウムと「天サイ！まなぶくん」体験

“災害に対する意識が確かに変化した”

千葉 久美子
二上小学校 PTA 副会長

東京に住む私たちは、震災被害をテレビの映像を通して見てはいるものの、どこか他人事のように思っていないでしょうか。

今回のシンポジウムに参加させていただき、広域ゼロメートル市街地の被害想定を一人一人が認識し、東日本大震災の被害は自分の住んでいる街にも起こりうるものなのだという危機感を持つ必要性を痛感しました。

昨年、葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会からお声かけをいただき、小学校のPTA行事において、子どもたちがiPadの防災用学習アプリ「天サイ！まなぶくん」を体験させていただきました。自分が住む街で災害が起きた場合の影響を目にしたことで、子どもたちの災害に対する意識が確実に変化したように思います。

このような実体験こそが、災害時の備えを日頃から考える契機となり、「減災」に繋がっていくのではないかと感じています。



20130323 シンポジウム写真



2013.3.9～10 東日本大震災から2年

南三陸町訪問
—被災経験の共有と交流の報告—

石川金治（理事長）
assist
渡邊喜代美（理事）

現地立って、たくさんの方々のお話を伺い、被災体験の共有をはかり、22, 23, 24の東京でのシンポジウム、地域交流に繋がりました。ここに現地で講師をしていただいた南三陸町の方々を紹介します。また、紙面では続けて、この訪問に参加したそれぞれの参加記を掲載しました。ごらんください。

9日

後藤一磨さん

波伝谷仮設住宅。宮城大学復興まちづくり推進員。海のこと、山のこと、歴史も質問してわからないことがないのではないかと、地域を熟知している。“被災地を歩くと縄文人の住居跡が不思議と被災を免れていることに気づかされた” “古代人の知恵と、現代人の知恵を融合し、新しい時代を拓くことの必要性を東日本大震災は私たちに示唆しているように思う”と「人知の限界」という文章で書いている。

もっと先を見つめれば、住民同士・住民と行政・行政間で対立する案件が少なくなる。このようなモデルを作る事こそ、大勢の犠牲者へのはなむけである。

佐藤徳郎さん

中瀬町自治会長、中瀬町仮設住宅。津波から逃げるとき、避難所、仮設に入るときもみんなをまとめてきた。コミュニティの崩壊ほど怖いものはないと熟知した地域のリーダーが、行動力を発揮し、中瀬町仮設では孤独死や引きこもりはないという。新しいまちへ進むときも地域を大事にしたい。被災1年の余悩んだが、農業を再会して、息子たちに技術力を伝承したいと、自力でハウス建設。被災前はブランドの菊栽培であったが、今は息子と家族で上質な「ほうれんそう」作りに挑戦している。

志津川まちづくり協議会の高台部会委員。中長期を見据えた意見を出している。

→葛飾区とNPOが協働事務局で「勉強会」を開催しているような方法を取れば、協議会のマネジメント権が住民側にも来て、実りある協議会になる。

→その後、委員の努力もあって、高台部会には担当課長が出席し、新年度には町長など行政側とまちづくり協議会の高台部会、公園部会、産業部会

が一体となって懇談し新しい関係が生まれた。

阿部憲子さん

ホテル観洋女将。家業がホテルで津波被害が軽微(と入っても下水は約4ヶ月、上水は使用不能となった)であったのが、被災者を自主的に収容した。公設避難所ではないので、行政とのややこしいやり取りはなく、自分でマネジメントできた。民間ということで配給の水も最初は届かず苦労は多かったがやりがいもあった。例えば海水を真水にする機械なども民間人の協力で設置できた。(行政にお願いしたら予算がつくまでに赤ちゃんが死んでしまう)。ホテル再開を急いだことには、従業員の働く場の確保が急がれたからでもあり、被災地を見てもらいたい、忘れて欲しくないの一念もあった。

内海明美さん

田尻畑仮設自治会長。大震災直後から志津川高校体育館避難生活では若い世代が一体となって台所を運営。避難所で出来上がったコミュニティや繋がりを保ち続けたいという決心のもと半年後に旧避難所近くに支援団体とともに「さんさカフェ」を立ち上げる。避難所で一緒に暮らした人たちが、その後も交流できる場が欲しいということでカフェを開いた。飲食業に関する知識や経験がまったくない若者が、創意工夫で運営している。

行政からの要望ではなく、避難民の自主的企画である。カフェで働くスタッフは、避難所の運営に携わった仲間と厨房等で働いてくれた仲間達。高校生から70代まで年齢も経歴もさまざまである。

ご自身は津波の被害により自宅は全壊流出。勤務先解雇。地元の地方公務員(役場職員)の夫は行方不明になり4ヶ月後に奇跡的に家族のもとへ戻る。現在高校1年生の息子と小学1年生の娘、義理の両親と実の両親とともに仮設住宅で暮らす。志津川まちづくり協議会の高台部会委員。現在は高台移転を住民の希望に少しでも近づけるように模索、奮闘中である。

山内正文さん

南三陸復興まちづくり機構理事長。福興市実行委員長。(南三陸町は復興>福興と表現している)。株式会社ヤマウチ社長。何もなくなった地域にいち早く店舗を復旧して、毎月に福興市を開くなど、商業系の元気付け、雇用促進に活躍する。

国道沿いにあった商店が流された。再興したい人が集まって仮説商店街「さんさん商店街」を作った。後に参加希望を出した人も、同じ条件ではないが仲間に入れている。規則を盾に拒む行政とは異なる。敷地と建物は行政が作ったが、内装は店の種類が違うので、自分で作らざるを得ない。土地の使

用期限が来ると移設しなければならないが、そのたびに自己資金が必要になる。悩みは多い。

解決策として、土地を買い店を建設する案、公設の店を借りる案とあるが、大多数は後者を希望。その理由は、子供が店を継ぐ可能性は低く、多額な投資をして、店を持つより借りた方がリスクが少ない。日本経済新聞の調査(2013.3.11 付け)でも仮設店舗を出た後に再建する意欲のある者が 75%もいる。自力再建は 26%で、公設の商業施設に入居したい人が圧倒的に多い。

→□組合長の「感」の良さを証明している。

→□高台移転の参加希望を期日までにさせというが家庭の事情が複雑な場合期日に間に合わないケースもあるが、今後その人たちをどう救うか決めていない。

工藤真弓さん

志津川まちづくり協議会の委員でもあり、公園部会のリーダーとして、土地利用構想のうち、公園に関する部分に熱心に取り組む。紙芝居から「つなみのえほん」を出版。宮城大学復興まちづくり推進員。登米市の南方仮設住宅の役員。上山八幡宮25代目神職。息子の由祐くんは一言「こわれたふるさどがあるんだよ」と故郷が消えてなくなってしまったと思っていた真弓さんを・・・いたわった。

工藤真弓さんは云う。“大津波であらわになった地形は、私たちに、これからどうやってこの大自然の中で立場をわきまえながら、地形と呼応しながら生きていくのか、問うているようです”

“春はスバシリ、夏は灯籠流しに、かがり火まつり、冬はサケの遡上を橋の上から見つめながら、この町の人を育ちました。町の生命線を大切にしたい本当の再生こそ、私たちに必要なのです”

“今、私は、このような提案を描いて、まちづくり協議会を通し、町にお伝えしています。そして一方では、大津波を被っても負けなかった、やぶ椿の植生から生き方を学び、種をまき、苗を植え始めています”

国道・川・海に囲まれて低地(地震による地盤沈下 0メートル地帯になっている)部の公園について、子供たちが喜んで利用する公園にしたいという希望を持っている。

行政計画では川の堤防も国道も高く盛り土して津波対策施設にするので、公園も高く盛る予定である。

しかし工藤さんは、海辺や川辺に面した公園なので、それを生かした公園にすべきだ。浜辺には貝や魚や虫など色々な生物がいるし、それを食べにくる鳥がいて、自然に地球の営みを体験し、時には海の危険も覚える。

この地域は元々は干潟を盛り土して出来上がった

土地だから、海に帰して干潟にするのが自然だ。行政の答えは、補助金をもらって造成した土地を海にすることはできない。といていたがその後、国土交通省も干潟について否定していないようだ。

→□見学者の意見:その補助金を返せばよい。また、海になっても土地がなくなるわけではなく利用の仕方が変化しただけだから、返金の必要もない
→社務所の 2 階に公園の絵や立体模型が置いてある。また紙芝居もするそうだ。

10日

早朝の袖濱見学

→□ここは漁港のため、岸壁に漁船が係船されている。岸壁に沿って歩道があり転落防止柵が設置されている。縦*横 15cm 位の箱型の上部の梁がねじれて切断されている。

(県道だが復旧工事未着手)。おそらく、船が流されるときに、船にもぎ取られたと思われる。前日に部屋の中で、同じように切断された物体を見たが、芸術作品のように見えて、恐ろしさを感じなかったが、生々しいもぎ取られた現場を見ると、自然エネルギーの大きさにたじろぐばかりだ。

及川庄弥さん

生涯学習課長・図書館長。子ども会議の協力者。図書館はオーストラリアとニュージーランドの支援で建設された、3月下旬中学生を伴ってオーストラリア訪問)

→□歌津の伊里前地区の津波当日の避難しながらの実写映像を見せてもらった。この映像は連続的なので津波の様相が良くわかる。例えば、「津波は押し寄せてきて、やがて引き波となって終わる」と言う概念を持っていたが、ここでは、向こう岸は押し寄せる波で、こちら側は引き波で、大きな渦巻きになっている。これは、別の入り江からの津波の押し寄せ波が、反対方向から流れてきて、前記の「引き波」のように見える。そのため、大きなエネルギーを持った渦になっていると思われる。電柱が一番最初に倒れ、次に小さい家がひとたまりもなく流される、大きな家は壊れることなく家ごと流れ、当たるものを次々と破壊していくが、やがてその家も傾いて行く。17 分間の被災記録に頭が打たれ、しびれた。役場前で参加者全員と及川庄弥氏で記念写真。

仮設のさんさん商店街

日曜日なので、一般客(おそらく被災地支援を旨とした観光客)が大勢来ていて、どのお店も混んでいた。ここの海で取れた新鮮な具材なので、美味しい。海の幸を盛り込んだ「きらきら丼」がアイディア丼で有名になっている。

防災庁舎で献花

鉄骨だけになった防災庁舎はもうれつな強風の中にあって11日の被災日をまえに献花がいっぱいであった。

阿部忠義さん

入谷公民館館長。YES 工房(語源は廃校になった学校を工房にしたので、廃と返事のハイをかけた)工房で作った売れ筋タコの姿の文鎮、合格祈願を兼ねているので、受験生に人気。その秘密は、蛸は英語でオクトパスと言う、即ち蛸の文鎮をオクト、難関校もパスする。というアイディアマン。新しい働き場所を提供している工房では、塩害に会った杉などの木で全国の神社から依頼された縁起物も作っている。わかめなどの水産業に向かない人たちの雇用の場になっている。ネットで売れるようになると良いな！

小野寺寛さん

「すばらしい歌津をつくる協議会」会長。地域のことを、歴史を熟知している。復興に関する知識も豊富である。「未来への遺言」—津波体験・新しいまちづくり作文集—を編纂する。被災直後からは、情報のない不安を何とかしたい！と「一燈」を発行。死者や行方不明者情報や義捐金情報、操業開始した水産加工場など暮らしを支える情報を掲載して地域に送り続ける。小野寺さんは「未来の大人たちの会議」の力強い協力者。

高橋武一さん

歌津地域の仮設伊里前商店会会長。伊里前の再生について地域の皆さんの声を提案書にまとめる尽力する。仮設伊里前商店会は、日常買回り品をおいて、地元の人の利便性をキープしようとかんがっている。仮設商店街のトイレを水洗に改良し、いつも気持ちのいい管理を旨としている。仮設伊里前商店会にはサッカーチームの旗がたなびく。一枚の旗が契機になって、どんどん増えていって、ギネスものだと自慢もする。

畠山幸男さん

「宮城大学復興まちづくり推進員」。寄木仮設住宅。畠山さんの現地を熟知した案内で歌津地域の伊里前仮設商店街、平成の森仮設、消防署、馬場・中山と広い地域を視察することが出来た。→平成の森仮設住宅には、寄付されたがなんと役に立たない集会施設があった。集会所が欲しいという情報を取得した支援者は、利用者の意向を聞くという工程を飛ばして、寄付者の思いだけで作った

ので、ミスマッチ施設となった。竪穴式の超クラシックで電気も使えない。結果として使われない寄付施設となってしまった。→間違えた支援ほど寂しいものはない。

消防署訪問

被災当日の署員の活動はすごい状況であった。→消防署員の心構えを聞き、「公僕の鏡」であると感動した。制服はいつでも自分の車に積んでいている。被災したときの悩みもあった。いつでも出動するために制服を着て待機するが、住民と同じ場所で仮眠は取れない。カーテンの覆い一枚でもあれば・・・プライバシーが保てる工夫ができるくらいの広さがあれば・・・良いが・・・睡眠がとれない悩みは、切なく聞いた。→消防署の標語「地震だ、逃げろ、高台へ」と言う標語を見て、葛飾区では未だ高台がない！のでこの標語が出せない。早く出せるようにしたい。

阿部くらさん

馬場・中山地域ではわかめの最盛期でわかめの共同作業、ワークシェアリングの考えで助け合っている話、被災時の避難所と活用した集落の公民館なども拝見した。狭い公民館に全員が避難して暮らしたことや、病人を運ぶ道を切り開いた話など小さな集落ならではの悩みもたくさんあった。くらさんは自治会長で漁師。集落の全体の暮らしも含めて考えている。→くらさんの話は LCCP の参考になる。

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

石川感想

→後藤一磨さんも工藤真弓さんも孫やひ孫のために、今自分たちは何をすべきかを問うている。この思いが行政に通じない悩みを抱いている。→まちづくり協議会に係る、佐藤徳郎さんは、協議会にしっかりした行政マンが出席しない。協議した事項がどのように処理されたか不明だという不満を抱いている。→山内福興市実行委員長は組合員の意向と行政の方針が摺りあわないと嘆いている。→一方、自主的に活動している、カフェの内海明美氏や YES 工房の阿部忠義には行政との調整に悩まされていない。→地域のことは、地域で決めて、地域が実行する「新しい公共」のスタイルを取り入れたら、解決の糸口になると思う。→即ち行政は、お金をすべて、地域の人に渡して、その使い方は、地域に任せる。その代り、結果責任は地域が負う。@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

20130309-10 被災地南三陸視察



南三陸町を訪ねて

宇賀 俊夫

NPO ア！安全・快適街づくり事務局長

3月9日、10日に協議会メンバー21名で被災地を訪問、現地の現況と被災経験を聴取すると共に、復興に当たって直面する課題は何か、それを乗り越えるためには何かが必要かについて討議することを目的に現地を訪問した。

現地でのスケジュール及び面談した方々との話し合いの要点は渡邊理事作成の訪問スケジュール表並びに石川理事長の報告書記載の通りだが、お会いした皆さんがきわめて雄弁であり、詳細に自分の経験を語り、ご自身の所属する団体の直面する問題点について強く訴えられていたのは印象的だった。

直面する問題について伺ったところでは、行政が急いで進めようとしている事項と自分達の希望する事項がうまくかみ合っていないことであり、両者の間のコミュニケーションが十分取れていないことで、これが復興を遅らせている大きな原因の一つとなっていると思われる。

一例をあげると、行政側は復興予算の使用期限が切れる前に早く着手しようと考えているが、住民側は行政ともっとしっかり話し合って孫子の代までを考慮したしっかりとした計画を作ってから取り組むべきだと考えているといったことや、とり急いで行う必要があるのは被災した沿岸部の住居地域のがれきを撤去し更地にするのではなく、高台移転の用地確保と建築着工を可能にするような土地・インフラの整備であるとかいったことがあげられる。住民の意向が充分取り入れられるためには住民中心の協議会に行政の責任ある人が参加し、その要望をしっかり聞いて計画の実現に役立てることであり、話し合いに時間がかかるようなら国に復興予算の執行期間の延長を働きかけるべきであろう。

他方、行政の側でも多くの人材を震災で失い、人手不足の上に、各地の市町村からの応援職員は能力はあっても現地の事情に疎い上に長期間とどまれず交代となるため十分に機能しない面もあること、住民側もいつまでも待てないといったことから他の地域に産業が移転してしまい、地元の職場が失われてしまうためにことを急がざるを得ないことなど、気の毒な面も多い。

このような状況下で国に求めることは「地元のことは地元で考え地元の人に任せる」ことに徹し、復興予算は地元がプールして複数年度に使えるようにするなどの手を打つことが必要と考えられる。

また、支援する自治体は派遣者をかなり長期間派遣することで復興を促進する必要があるだろう。

1泊2日と短い訪問だったが多くのキーマンの方々と効率よく会うことが出来、所期の成果をうる事が出来た。これも渡邊理事が過去2年にわたり地元の復興を支援してきたことによる人と人とのつながりによる所が大きい。この場を借りて感謝したい。

葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会 と 南三陸町の交流について

鈴木 庸介

葛飾区役所 地域振興部 防災課

平成25年3月9日から10日にかけて葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会として、被災地へ訪問させていただいた際の感想を報告します。

①語り継ぐことの重要性について

私が現地へ到着して目にした光景は、これまで報道で見てきた壮絶な光景ではなく、基礎部分が残っているながらも、大半の瓦礫が撤去された広場であった。当時、そこで何があったのかが受け取りにくくなっている印象を受けたと同時に、過去の問題として捉えられてしまったり、復興が進んでいるという誤解を受けたりする危うさを覚えた。

随所に倒壊・半壊した家屋や、積み上げられている瓦礫を見ることはできるが、ある程度の表面的な整理が進んでいる被災現場と、ようやく心の整理がつき始めた被災地の方々の笑顔が、皮肉にも誤解を促してしまうのかもしれない。このままでは、被災しなかった者の中に、東日本大震災を現在も継続している災害として捉えられなくなってくる者が出てきてしまうだろう。

千年前の先祖の様に、震災そのものを語り継ぐことに加え、今まさに体験している復興における苦難についても継承することが必要である。

②被災地と被災地

被災地への訪問前は、家族も家屋も家財も失った方々が応急的に仮設住宅などに入居して地域を再建することは、阪神淡路大震災や中越地震でも見られた一般的な大規模災害時の対応で、いわゆる「あたりまえ」という発想しかった。これは、私の当事者意識が極めて希薄だったと言わざるを得ない。

また、復興庁が設置され、義援金を集め、東北に関する明るい話題を多く取り上げるニュースが増えるたびに、大きな勘違いをしていた事も否めない。被災を安易に捉え、口先だけで「大変」と言い、深い考察をしてこなかった自分を反省している。

実際に訪問し、直接お話を伺う機会を得たことで、大災害による恐怖、家族を失う悲しみ、家や生業を失う不安、復興の負担などを肌で感じ、最もつらい目にあった方々が最も大変な役割を担う意味を真剣に考えるきっかけとなった。また、応急策では不十分だからこそ自治会や商店会やNPOが協力し補完しあっている実態や、被災して著しく低下するQOLについて考える機会を得たことで、行政の課題として捉えられるようになった。

被災地への訪問を終えた今では、知らない土地の出来事ではなく、被災地に対する非災地からの支援が今まで以上に必要なことを継続して周知していくべきだと思っている。

③非災地が学ぶこと

私は、被災地の現状を、最低限の物理的な整理がようやく落ち着き、これから新しい街を再生していく過渡期だと理解している。また、「がんばろう！」「今から、ここから」と書かれた垂れ幕やポスターは、慣れ親しんだふるさとでの再出発の決意の表れだと感じている。

しかし、このような掲示物がいたる所に掲げられていることは、非常に頼もしく感じられる一方で、依然として自らを鼓舞しないと潰れてしまいそうな住民の心理状態を象徴しているとも感じられた。これからは、今までの物理的な支援から、政策的で継続的な支援が重要になってくることは間違いなく、行政・住民・コンサルなどを分け隔てず、被災地が一丸とならないと対応できないと感じている。千年先を見据えた街づくりを実行することは陰しい道のりだが、住民の希望と包括する街づくり案が完成することを願うばかりである。

非災地が被災地の現状から学ぶべきことは、行政と住民が垣根なく語り合い、理解し合うための下地と気運を醸成し、協働を実現させることの重要性である。そして、非災地で、せめて今の東北地方で起きている復興の課題を再発させないように準備をしていきたい。

④課題と行政の役割

復興や街づくりについてのお話を伺うほどに、物理的な「街」を復興させる行政と、コミュニティを含めた「まち」を復興したい住民との意識の乖離を感じ、私自身がいかに当事者意識を持たずにいたことを恥じると同時に、立場によって異なる意見を包括する難しさを感じた。また、「被災当時と、数年が経過した時の心理状態の違いによる街づくり論の変遷」や、「住民と行政が普段から協議しておくべきだった事」など研究しておくべき課題が多くあると感じた。

お話を聞かせてくださった皆さんが街づくりを主体的に進めている背景に「行政不信」がある事を感じ、利害を超越したところで議論すべき街づくりを、利害が冷静に見えてしまう平常時にいかにして進めていく方策を導き出すことは簡単ではないこともよくわかった。

この度の被災地交流のおかげで、行政不信をなくし直面する困難を乗り越えるためには、行政が住民と寄り添い、住民とともに政策を進め、本当の意味での住民自治を実現させるという地方自治の基本に立ち返るしかないことを理解し、行政からも何らかのアクションを起こすべきだと確信できた。

今の地方行政は依然として行政主導型であるが、この震災を地方自治の本旨である住民自治・団体自治を実現し、住民主導型へ転換していく機会として捉え、いずれ起こる大規模災害に備え、葛飾区の協働を継続していきたいと感じている。

⑤おわりに

最後に、訪問の機会をいただき、復興途中の貴重なお時間を割いていただけたこと、直接お話しをお聞きして被災地について勉強させていただいたこと、そして、皆さんの笑顔とおもてなしで南三陸町そのものを楽しめたこと、そのすべてに感謝しています。青く美しい空と海が素敵な南三陸町の一日も早い住民にとっての本当の復興を願っております。また、併せて葛飾区職員が来年度も南三陸町役場へ出向となり皆様のお世話になりますので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

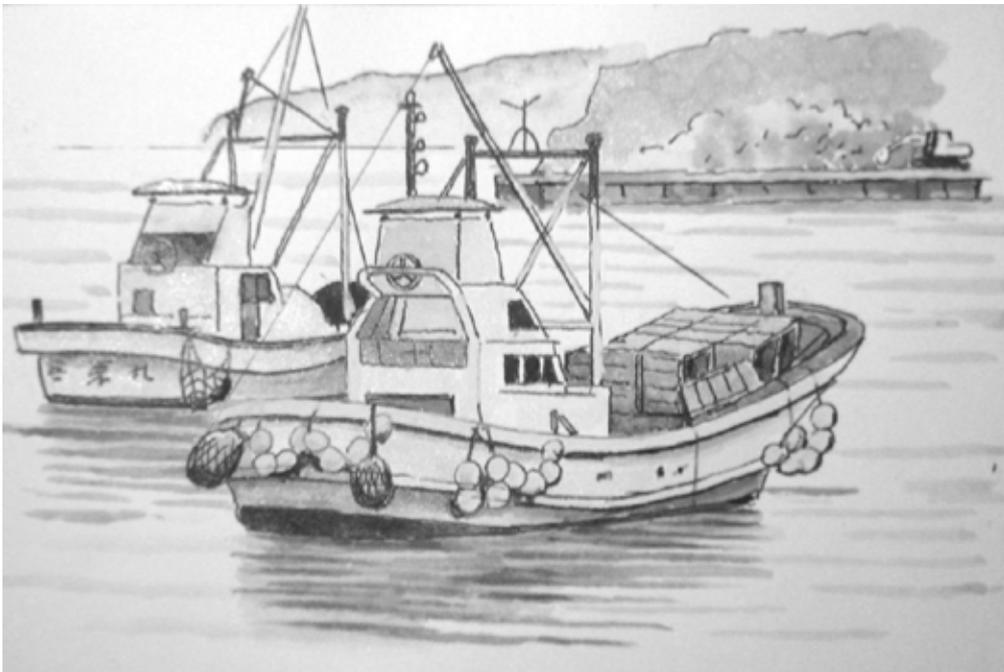


快晴の朝、時刻通り予定者全員が揃って東京駅を出発、車内ミーティングや、資料配布など終わり、私にとって初めての被災地訪問が始まる。二日間の活動が被災地の住民、及び今後の我々の活動にプラスになるようまた、心に傷を負った被災者の方たちを慮るよう心を引き締める。

石巻市に到着。TVや新聞で繰り返し見た風景が目の前に広がる。巨大災害の凄まじさが車窓から飛び込んでくる。応急的な道路復旧と片付けは進んでいるが、仮設住宅建設以外の復興はほとんど見られない。

南三陸町到着。ここでも街づくりの進展は見られない。ここからは交替で被災した語り部乗車、志津川や歌津などを案内される。家族や自宅など多くの物を失ってなお果敢に活動する姿に感銘を受ける。又渡辺理事ほか先行して被災地支援に駆け付けた人達の行動範囲と人脈の広さにも感心する。接する人が増えるにつれ復興にあたってのさまざまな障害が明らかになる。車を降りて人の集まっている仮設商店街などを歩くが、意外に人の表情は明るい。

二日目 朝港をウォーキングする。静かで美しい港の風景だが、どうしても陸上のがれき片付け作業に目が向く。軽くスケッチ。



200人を収容しすし詰め状態だった避難所や、鉄骨だけ残った庁舎での強風の中での献花、明るい雰囲気仮設市場、庁舎や人材・資料など失った自治体の想像を超える困難、など多くの方と接触し生の情報を得て訪問は終了した。

以下に 雑感・今後の活動の参考にとって考えさせられた事柄など

1. 人知を超える自然の力とどこで妥協するか。
2. 普段からの住民同士のつながりがいかに大切か。
3. " 災害対応教育 "
4. 阪神とは全く違う被害状況に、地震のメカニズムの多様性と対策の難しさ。
5. 4. に重ねて、洪水や高潮の多様性にいかに対策をたてるか。

復興に向けた思い

成戸寿彦

NPO法人ア！安全快適街づくり 理事

東日本大震災後、三回目の被災地訪問の機会を得た。一回目は被災三ヵ月後、首都道路協議会の企画で東北地方整備局をはじめ気仙沼・釜石・大船渡・陸前高田の各市街地を訪れ、津波による被害のすごさに息を呑んだ。また二回目は被災 8 ヶ月後、進まぬ瓦礫処理の実態を目の当たりにした。

そして今回はちょうど二年目となった被災地の復興を、南三陸町を中心に視察する機会となった。被災地に日ごろ関心を寄せながらも直接お手伝いできることもなく、かえってご迷惑になるのではと思っていただけに、今回のように渡邊さんが見つないでくれたNPOの一員として訪問できる機会は得がたいものだ。

復興の実態を視察するのが主な目的ではあったが、いたるところで二年前の 3 月 11 日の実態を映像でまた生の声で見聞きするにつけ、身が引き締まってくる。たとえば、当日カメラで惨劇を写していた方が漏らすうめきともため息とも違うこの言葉が今も頭から離れない。「人生とはこういうものでしょうか。はあ〜〜。」

また被災を免れたホテルの女将さんの、民間人が良くぞやったという 600 人に及ぶ人々を受け入れたという緊迫した状況での決断(それに対する行政の対応は遅かったようだが)には拍手を送りたい。さらに丘の上の 50 畳程度の公民館に 150 人もの方々が寝泊りをした我慢強さも語り継がれるべきものだろうし、その案内をしてくださった佐藤徳郎さんの「あれが私の家で唯一残った二本の木です。」と淡々と話された言葉の裏にある無念さが伝わってくる。

今回の(私にとっての)視察目的である復興については、まったく短い時間ではあったが、漁業・商業・まちづくりの三点で印象に残ったことがあった。

まず漁業については、ちょうど和布採の最盛期であったので、浜で塩出しして和布蕪と和布にわけるところから再び和布を塩漬けにして選別し水分を切って出荷袋に詰め込む工程までを見学することが出来た。主力となるべき漁業についてはまだまだであろうが、具体的な産業が戻ることによって活気が出てくるような印象を受けた。お忙しいなか親切に対応してくださった皆さん、ありがとうございました。

次に商業については、仮設店舗での取り組みが印象的であった。まず志津川仮設商店街。商店街といっても日用品が中心ではなく、名産品や特産品と食事処といった観光客対象のものという印象だが、かなりの規模のものであった。また隣接した「木の家」では、地元の復興個人住宅としても地元の木材を活用して低廉な価格で出来る規模を目指している、といった及川善祐さんの取り組みが印象的であった。また伊里前商店街では、折から「わかめ祭り」を行っていたが、仮設という暫定期間での投資をいかに抑えてなおかつ華やかさを失わないようにと取り組んでおられる馬場さん・中山さんのご苦労が印象的であった。

三点目のまちづくりについては、「歴史まで流されてはたまらない」という心意気で取り組んでおられる工藤真由美さんのご苦勞が強く心に残っている。南三陸町志津川地区の復興計画は、ざっくり言えば、八幡川をはさんで左岸となる東側が商業・産業ゾーンで右岸となる西側が公園・緑地ゾーンとなっており、住宅は高台へ移転することになっている。そして八幡川沿いの低地はT.P. 8. 7~6. 5メートルの堤防で守る計画となっているのだが、工藤さんは、人が活動する東側の堤防と公園となる西側の堤防の高さを変えるべきだ、というわけだ。

これは河川工学でいうところの越流堤の考え方で、一理ある。現に、荒川放水路が作られた当時は東側に市街地が少なかったため、堤防の高さを低くし堤体も薄く作られている。工藤さんは、津波を一時公園側に誘導し市街地を守るべきだと言われるわけだ。

今回の視察には、旧建設省河川局にいらっしゃった布村さんが同行されているので意見を求めてみた。布村さんの意見は、一定の降雨時間と降雨強度で降る雨と津波とを同じに論ずることは出来ない、とやや否定的であった。確かに限定的な雨と無尽蔵ともいえる海水を同じに論ずるのは適当でないかもしれない。しかし堤防の高さにしても3・11程度の津波では防げないものであり避難が前提になっているとすれば、(公園側に越流させることで)その避難のための時間を稼ぐことは出来るのではないか。また工藤さんは、高い堤防を作って将来の人が逃げることをまた忘れてしまうことがこわい、堤防の高さを変えることによって避難が前提であると後の世まで伝えることが出来る、ともいわれていた。

確かに堤防の高さを変えることによってどの程度の時間を稼げるのかあるいはまったく無意味なのか、また新市街地側に新たな安全神話が生まれぬか、あるいは越流した公園の先の安全策は、などなどの新たな課題が生まれる。これらの検討にかけられる時間との戦いということだろうか。「歴史まで流されてはたまらない」という思いで取り組んでいる新しい公園作りや避難を前提としているのであればその避難路に樺の木を植えようという提案とともに、地域の方々の声が極力生かされることを願っている。

工藤さんはまた、「つなみのえほんーぼくのふるさとー」という絵本を出して、3・11のことを後の世に伝えようとしている。その絵本の最後は、こう結ばれている。「いのちをかけた伝言を、明日に伝えてゆくためにわたしたちは生きてゆきます。」と。この言葉は、今回の津波で辛くも生き残った方々全員の思いではないだろうか。限られた時間という宿命を負わされた復興事業ではあるが、こうした方々の思いが届く復興事業が一日も早く完成されることを願ってやみません。



南三陸を視察して

青柳 勇

東新小岩5丁目町会 会長

東新小岩5丁目町会の会長を受けて丁度1年目になる。

会長を受けてから、この地域の「安全・安心・明るい街」創りと、良く言われます。

具体的にどのように取り組み、行動を行ったら良いか模索中であった。そんな時、お隣の町会「東新小岩7丁目町会」会長の中川榮久さんのアドバイスで「NPOア！安全・快適街づくり」に参加するようになった。

この地域の地盤が一ゼロメートルということは良く知って居ましたが、水害が起きたらどのように、またどの位の水位になるのかが、想像できませんでしたが、東京大学の加藤准教授が開発した「ipad」（天才まなぶくん）で町内会のどこでも水位がどの位になるかが具体的にみる事ができて、大変参考になりました。

また、3月9日～10日に掛けて、東日本大震災を受けた南三陸町の方に訪問する機会があった。

すでに、テレビ報道やニュース等で災害のものすごさは理解はしていました。

現地へ行って、ガレキはほとんど片付けられて居ましたが、人間の営みをどうするのか、どうすれば地域のコミュニティが出来るのかを考えると、ただ茫然とするばかりでした。そんな中で、現地の宮城大学のまちづくり推進委員の後藤一磨先生との出会いの中で、いろいろな現地の状況、三陸の地形、先人たちの知恵、自然に対する畏敬の念等、人間のおごり、経済優先の考え方、自然との共生等々いろいろ勉強になることばかりでした。もし、東京、そして自分たちの住んでいる街に災害が起きたときのことを思うと、ただただ戸惑うだけになるだろう。

しかしいろいろな現実を見聞きして、一人でも多く助かる方法は、現地でも言う「ひとりんでんこ」など、自分自身の身の安全の確保が何よりも優先に考えなければならぬと思う。それから大切なことの中で、ご近所との声掛け「近所付き合い」の大切なこと。そして、近隣町会との連携、意志の疎通、情報の共有などが、いざ災害が発生という時にとっても役立つ事だと思う。

今回の南三陸町訪問は、私にとり大変勉強になった訪問でした。

//////////////////////////////////////下記写真渡邊 2012/2 撮////



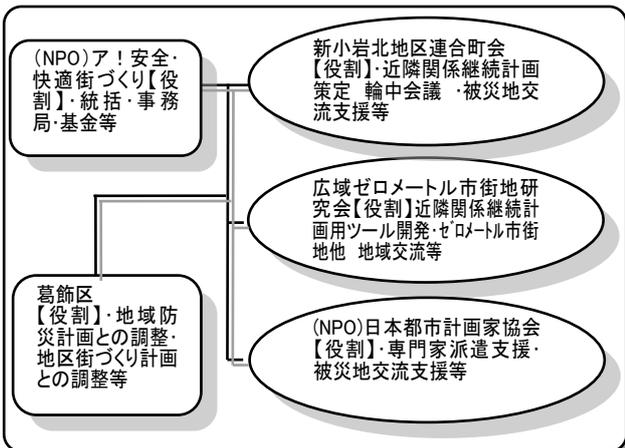
この「支援から連携」は都市計画家協会の機関紙 [Planners]74号特集「3・11を踏まえた都市計画まちづくり(その2)“復興まちづくりの担い手は今”に寄稿したものである。

支援から連携へ

渡邊喜代美

NPO ア！安全・快適街づくり 理事

●復興もまた新システムの展開が鍵
 3・11以前から10年の余続いている水害に対する危険性が高い広域ゼロメートル市街地の活動が現在「新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」として連携型の新システムで展開していることをまず特記したい。よく「地域主体」というが地域の課題解決には、この程度の連携型が当然という社会の醸成が希求される。被災地においても当然である。



この協議会と宮城県南三陸町の地域は、シンポジウムや交流で連携型の展開が始まっている。

●共有できる“何か”が地域力となる
 南三陸町での2年間は、上図の協議会の連携型活動力、そして当事者主体の住まい・まちづくりのプロセスが大切だとする NPO 法人コレクティブハウジング社のミッションと行動力に学ぶところが多い。基底は“聞く”こと。“出会う”こと。“知る”こと。被災後の孤独や先の見えない状況に立ち会うことは、これまでの活動体験や感性やらを全開してもおぼつかないが、まず基底はおさえ、そこから“何か”を共有することがとても重要である。その“何か”とは、人と人、人と自然、暮らしの中にある。

例えば、仮設の集会所で小さな集まりを繰り返していくうちに、そこは地場の知見のオアシスとなって、さまざまな“何か”を、作為的ではなく共有していくことができる。例えば、ご馳走になった「めかぶ」は実においしい！と賞賛すると、みなさん館のアイデア商品「めかぶ丼」となる。「ほうれん草」ならいけるかもしれないと親子で挑戦する農業人の畑の石ころ拾いだけの支援でも収穫が気になって電話をすると、海と山の連携で地域おこし!“観光農業をやってみて一な”と展開する。集まって刺し子を作りながら年配者の経験談、結や講の話で盛り上がる。刺し子はコミュニケーションツールと同時に作品となって東京のフェアトレードの店頭にも並ぶ。こんな実に小さな出来事から、底力が奮い立ち地域力はスパイラルアップし、新しい“何か”が生まれるのだ。

●“まち”創再生への声を聞く力をつける
 南三陸町の小野寺さんから「未来への遺言」“津波体験・あたらしいまちづくり作文集”をいただいた。町の小・中・高の学生307名の記録だ。恐ろしい体験を忘れまい！けなげに支援への感謝を述べつつ“未来の大人たち”のメッセージは強く、創再生を担いたい志が綴られている。中3の三浦君は「この町を必ず復興させてみせます」と言い切る。女性たちの復興への感覚もすばらしい。夫を津波にとられ高齢親4人と2人の子を育てる女性は、自分の体験を地域社会のこれからの置き換えて考え、地域に役立つコミュニティビジネス、コレクティブハウスを模索する。高台移転を決心した女性は、被災地は公園になる、高い堤防で困うことは果たして解決策か、否、干潟化による親水空間や教育の場として未来へ継承をしないと、漁業人や農業人とコミュニケーションする。“女・子ども”は柔軟である。“できることはなにか”率直に考え学ぶ。“担い手たち”はすでに名乗りを上げているのだ。そこでわれら「専門家」はあるいは「支援者」は地域の深い声から学び、皆と連携し、未来を俯瞰する担い手になろうよ！と素直にいいたい。

防災訓練

避難用ボート使用訓練

学校・自治町会の防災倉庫に格納されているボートを実際に中川に浮かべ、大規模水害に備えた操舵訓練を実施します。当日は、川辺を開放し、間近で消防のデモンストレーションを見ることができます。



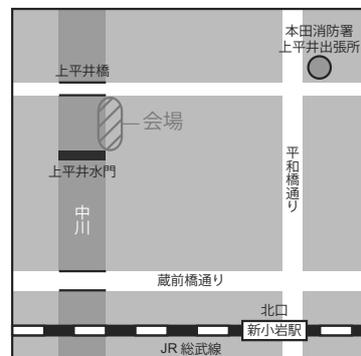
日時：平成24年9月9日（日） 9：00～12：00

場所：中川 上平井橋東詰～上平井水門のテラス護岸

（葛飾区西新小岩3丁目45番先）

主催：新小岩北地区連合町会

協力団体：葛飾区，東京消防庁本田消防署，
警視庁葛飾警察署，NPO法人ア！安全・快適街づくり，
広域ゼロメートル市街地研究会



※ この訓練は、東京都「地域の底力再生事業助成」を受けて行うものです。

♪♪♪ **松上小学校 出前授業** ♪♪♪
「安全で快適な街を」～小学生からの提案～

塩崎由人

東京大学加藤孝明研究室（博士課程）

2013年2月22日(金)に、松上小学校で5時間目の時間を頂き、小学6年生の2クラスを対象に出前授業を行った。この授業は小学生たちに将来の進路を考えてもらうきっかけとするため、定期的に外部から様々な職業の人を講師として招き、仕事内容を紹介するというものである。今回は、私と同研究室のマリア・デヴィさん(修士課程、インドネシアからの留学生)が都市計画の研究者(の卵)として講師に招かれて授業を行った。

“水害の危険性は日本だけの問題ではなく、海外の都市も同様の問題を抱えている”

この出前授業では、小学生たちに都市計画やまちづくり、防災について簡単に説明した後、ゼロメートル市街地の危険性、新小岩北地区で行われている町会やNPOア！安全・快適街づくりの取り組みを紹介した。このような水害の危険性は日本だけの問題ではなく、海外の都市も同様の問題を抱えていることを知ってもらうため、マリアさんから、2013年2月に発生したインドネシアの大水害の様子を写真も交えながら説明してもらった。実際の水害の写真が現れると、生徒たちは静まり返り、非常に真剣なまなざしで説明を聞いていた。

生徒たちに浸水の危険性を説明した後、河川空間を活用した親水の可能性にも気づいてもらうため、諸外国の親水空間の事例をマリアさんから紹介してもらった。アムステルダム、ロッテルダム、パリ、ベニスなどのとても楽しそうな親水空間の写真を見せられて、生徒たちは興味深そうに話を聞いていた。

“浸水も親水も同時に楽しく学ぶことが重要” “「学びの場」があればいいなあ”

最後に、中川七曲りや親水テラスの写真を見ながら、生徒たちに「中川でしてみたいこと」、「中川がどんな空間になったら楽しいか」ということを提案してもらった。生徒たちは班ごとに分かれて、とても熱心に話し合いをした後、ユニークで愉快的な提案を発表してくれた。「中川に船を浮かべて舟遊びやレースをしたい」、「灯籠おくりをしてみたい」、「中川に向かってバンジージャンプがしたい」、「中川にガラス張りの水中トンネルをつくって川底からスカイツリーを見てみたい」など、次々に新しい提案が出てきて、授業はとても盛り上がった。

今回の授業を通して、子どもたちには浸水も親水も同時に楽しく学ぶことが重要であると感じた。今回は教室での座学であったが、地域の中に親水を体験しながら、浸水への備え方を考えることができる「学びの場」があればいいなあと思う。子供の豊かな発想力が、水害の危険性というマイナスをプラスに変えてしまう原動力になるかもしれない。



平成 24 年度葛飾区協働事業

「親と子が語り継ぐ大水害時の避難とパネル展示」について

増澤一郎
NPO ア！安全・快適街づくり

当NPOは、大水害時の避難についてこれまで、シンポジウムやパネルディスカッション・訓練等を、地元町会・自治会の壮年層を対象に又、水害に関するパネル展示を葛飾区役所総合庁舎フロアはじめ、各地区センターで来庁舎を対象に繰り返し開催している。

親と子が語り継ぐ活動

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災を契機に、大災害発生時における避難の重要性が改めて再認識され、今まで以上に、安全・迅速・確実な避難の啓発活動をより積極的に進めることが求められた。地元小中学校生や若年層へも活動範囲を拡げることとし、平成24年度葛飾区協働事業に「親と子が語り継ぐ大水害時の避難とパネル展示」を応募、平成23年9月に採択された。

「親と子が語り継ぐ大水害時の避難」は、文字通り学校や町会・自治会で行った防災訓練等の夜などに、家庭団欒のひと時、親子が話し合い、それを各家庭でつないで行って欲しいとの思いから、町会役員と共に、地域の小中学校を訪ね協力をお願いしたところ、どこの学校も好意的かつ強い関心を示された。

上平井中学校理科部

“知る”意欲と向上心はスゴイ

まず、上平井中学校とは平成24年7月から、同校生徒会理科部員15名との共同研究をワークショップ形式で定期的に行い、10月の学芸発表会で全部員が、「地域の地盤沈下と液状化について」と題する調査研究結果を報告、全校生徒に強い印象を与えた。12月16日（日）同メンバーは、国土交通省荒川下流河川事務所の「あらかわ丸」で東京東部低地帯を船から視察し、堤防で自分達の生活が守られている状況を実感する一方、今後、地域の地形・地質を一層詳しく知る必要があると、理科部の感想だった。

キャリア教育・出前授業とパネル展示

平成24年11月10日（土）新小岩学園で、芝浦工業大学中村仁教授の「地域防災を通して助け合う心を培おう」講演会后、避難について小学5,6年生、中学1,2年生がキーワード用紙を使ってシミュレーションし、それを家族で話し合い、感想文を持ち寄り文集とした。併せて、校舎廊下で大水害パネル展示を開催し、多くの生徒が興味深げに見入っていた。

平成25年2月22日（金）新小岩学園小学6年生49名を対象に、東京大学院生塩崎さん、留学生のマリアさんの2名によるキャリア教育「より快適で安全な街に」をテーマとする出前授業とパネル展示を行った。

授業を受けた生徒からは『自分も将来街づくりの仕事がしたい。』、『水害に他の国の人達も苦しんでいることを初めて知った。』、『楽しく大変役に立った。』、『今日の授業を家に帰って親に話したい。』等々の感想が寄せられた。

葛飾区役所総合庁舎でパネル展示

“区民の皆さん、真剣なまなざし！”

平成25年3月18日（月）から29日（金）までの2週間、葛飾区役所総合庁舎1階フロアで、「大水害と東日本大震災時の避難」をテーマとするパネル展示を、新小岩北地区町会・自治会役員の協働を得て開催した。

来庁した区民は一様に葛飾区の土地の低さと水害の危険性に吃驚すると同時に、東日本大震災にめげず復興に取り組む被災者の姿を食い入る様に見つめていた。

平成25年度も引き続き地元町会・自治会共に、「親と子が語り継ぐ大水害時の避難とパネル展示」等の活動を新小岩学園、上平井中学校、上平井小学校で行う予定である。



会員レポート

市民防災まちづくり塾の活動

利根川水系・連合水防訓練の見学会に参加して

高田 信一

NPO ア！安全・快適街づくり（江戸川区在住）

久方ぶりの好天に恵まれた去る5月18日午前7時30分、市民防災まちづくり塾がチャーターした京成バスが参加者40名弱を乗せて、新小岩駅北口広場から千葉県香取市佐原口の利根川河川敷に向って快適に走り出した。途中、開催会場までの国道が渋滞していたため、午前8時50分開始のオープニングセレモニーには間に合わなかったが、本番の水防訓練は開始から最後まで、じっくりと観察することができた。

まず午前9時30分スタートの演習第一部では、地元香取市の自主防災会と消防団による豪雨で決壊しかかった河川堤防を修復する水防工法や、住民参加の避難訓練が行われた。また11時40分からの第二部では、香取市の広域市町村消防本部と千葉県警、更には陸上自衛隊第一空挺団や日本赤十字社千葉県本部が加わり、利根川の水面に作られた仮設家屋の屋根に取り残された住民を、救命艇やヘリコプターを使って本番さながらの救出作戦が繰り広げられたのだ。

そして12時30分頃にすべての演習が終わり、見学者も参加して閉会式が行われると私たちはバスに戻り、水郷さわらのドライブインで遅い昼食をしたり、当地の産直野菜を購入したりした後、水の駅、川の駅などを経由して夕方には無事新小岩駅北口に帰着したのである。



閉会式



ヘリによる救出作戦

「首都防災ウィーク」は、当 NPO ア！安全・快適街づくりも後援をしています。墨田区はゼロメートル市街地としては荒川右岸にあり、地図を開くと、葛飾区内の中川七曲が荒川を隔てて繋がっていた様子が良くわかります。いわば地震水害運命共同体の地域でもあります。おおいに今後の連携を図って行きたいと思います。

関東大震災 90 周年・首都防災ウィークのご案内 2013年9月1日～8日

木谷正道

首都防災ウィーク実行委員会事務局長・日本棋院墨田支部長

10万5千人が亡くなった関東大震災(1923年9月1日)から90年。

9月1日(日)～8日(日)まで、墨田区の横網町公園(3万八千人が焼死した旧陸軍被服廠跡)で「首都防災ウィーク」を開催します。

東日本大震災を機に、日本は「大地動乱の時代」に入りました。関東では房総沖、首都直下、東海、富士噴火などがいつ起きても不思議なく、特に直下地震による激しい揺れでは、家の倒壊と延焼、そしてゼロメートル地帯での堤防決壊・大水害が脅威です。

将来の危険として指摘されてきたことが、待ったなしの問題となりました。

首都防災ウィークは、皇族が参加される秋季慰霊大法要に始まり、震災・復興・防災を考える一週間(公募中)、企画展「子どもが見た関東大震災」、鎮魂と交流の子ども太鼓、大震災語り部と紙芝居、耐震・家具固定相談会、防災何でも相談会、防災シンポジウム、コンサート、鎮魂の線香花火大会など多彩です。

最終日8日(日)13時から「首都防災フォーラム～私たちは今、何をなすべきか?」。出演は北原糸子(国立歴史民俗博物館客員教授)、柴田いづみ(滋賀県立大学名誉教授)、中林一樹(明治大学特任教授)、久田嘉章(工学院大学教授)、御厨貴(東京大学客員教授)。

16時からメインイベント「防災囲碁まつり634(ムサシ)面打ち」。プロ棋士指導碁 200人、団体戦 400人、9路盤ふれあい碁碁 20人。老若男女が参道を埋め尽くします。

石川理事長に全面的な応援をいただきました。本当にありがとうございました。

墨田と葛飾の連携を進めたいと思っています。どうぞ、よろしく願い申し上げます。



前列左から3人目が木谷さん、その隣4人目が中林先生

新会員紹介

今回は、船山吉久さんです。
早速、事務局会議で重要な役割を担ってくださっています。豊富な実務体験が地域に生かされ、葛飾区でのご経験が地域への関心に繋がってすばらしい。力強い限りです。

船山 吉久

今年3月からア！安全・快適街づくりに入会させていただいた船山吉久と申します。昨年3月に都建設局を退職し、現在、建設関連のコンサルタントに勤めています。

石川理事長とは、理事長が江東治水事務所長や河川部長時代に一緒に仕事をさせて頂きました。江東治水事務所では、高潮防潮堤の耐震設計や排水機場の設計・施工管理など、河川部では、神田川と目黒川の総合治水対策計画の作成や隅田川・セーヌ川の姉妹河川提携など、当時としては先進的な仕事を厳しいながらものびのびと楽しく取り組ませていただきました。

また、葛飾区へ課長として出向した時には、連続立体交差事業の他、再開発や区画整理など市街地開発事業を担当させていただいたので、葛飾区のまちづくりや震災対策に関し、人一倍の関心を抱いています。

東日本大震災を踏まえ、都は、東部低地帯の防潮堤や水門などの治水施設が、想定される最大級の地震や津波に対しても耐えられるよう耐震補強事業を昨年度より開始し10年ほどかけて完成することとしています。

しかし、大地震は、残念ながら人知を超えて想定外の被害をもたらしてきたことは、災害の歴史の教訓です。低地帯は、堅牢な防潮堤に守られているとはいえ、防潮堤は100km以上あり隠れた弱点が全くないとは言い切れません。このため、防潮堤の一部が破損しても、逃げることにより人命だけは守れるよう避難用高台を整備することは、大変重要な施策であると考えています。

10年ほどの歴史と実績のあるア！安全・快適街づくりの活動に、途中から参加してどの程度お役に立てるのか不安な面もありますが、東部低地帯の高潮対策事業やまちづくりの経験が僅かではありますがありますので、微力ながらも皆さんの戦力になれば幸いと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

ハザードマップ資料「洪水に備えて」がリニューアルしました



葛飾区地域の各戸には配布されるものですが、必要な方は、NPO ア！事務局へご連絡ください。

NPO ア! 会員の古川修です。このたび「天サイ!まなぶくん」に引き続き「NPO ア! 安全快適街づくり」のホームページリニューアルを担当させていただくことになりました。

このNPO ア! ニュースをご覧ください。すでにリニューアルされたホームページをご覧ください。変更点についてご紹介させていただきます。



◎ 選びやすく変化のあるトップページへ変更しました

トップページを見れば更新された情報がすぐにわかるようなデザインに変更し、トップ画像も一定時間で切り替わるようにして飽きさせない仕組みを導入しました。

◎ 素早い情報更新が可能になりました (CMS の導入)

今まで更新には専門の知識が必要でしたが、Word 文章を作成するような操作で簡単に更新することができ、伝えたい情報をいち早く公開することができるようになりました。

◎ SNS サイトによる情報拡散支援 (facebook ページへの自動投稿)

情報を更新すると facebook のページも合わせて更新されます。「いいね！」を押していただいた方には、御自身の facebook ニュースフィードに更新内容が配信されます。

この新しくなったホームページをぜひとも今後の活動に役立てていただければと思います。

表紙・裏表紙の紹介 //////////////////////////////////////

写真： 会員提供。中川七曲から富士山と新タワーを望む。

書： 石川金治理事長。「中川に相応しい風景が見られなくなった理由 回復させるにはどうしたらよいかへの夢を皆で考えよう」という説明をいただいています。

“中川に相応しい風景”が見え始めてきたでしょうか。

裏表紙墨絵：小川信子先生(日本女子大名誉教授・当 NPO の評議員) 18号の表紙のために書いていただいた墨絵です。中川七曲の新タワーを見える場所が描かれています。七曲のゆうゆうとした風景はやはり墨絵にあります。

////////////////////////////////////

♪♪♪♪♪

編集後記

NPO ア！安全・快適街づくりは創設2002(平成14)年から2013年、今年で11年に入りました。

2011(H23)年度は「葛飾区西新小岩三丁目周辺地区における安全・快適街づくり勉強会」を母体に「葛飾区西新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」の立ち上げを中心に多様な活動が連続しておこなわれました。引き続き2012(H24)年度は協議会によるシンポジウム、地域の中学校との連携、輪中会議、天才まなぶくんの登場で、大人も子どもも町のリスク観察にわいわいと参加しました。また、シンポジウムを開くにあたっては、参加いただいた南三陸町にうかがい、地元の方々に現地を案内いただいたり、お話を伺ったりして勉強しました。濃密なスケジュールの参加記も掲載しました。中学生は沈下の記憶“古井戸”(「葛飾区有形文化財」)の保存先を訪問した。町会の若手とご一緒に全国まちづくり会議 IN 神戸への参加は夜を徹して意見を交わしました。シンポジウムでは NHK 大越キャスターの友情出演や今は高校生 1年になった中村君のパネリスト参加など話題は盛りだくさんです。大越さんの「大越健介『現代を見る』(2013年3月23)広域ゼロメートル地帯にて」を是非ご覧ください。素敵な記事にまとめてくださっています。

2011・3・11東日本大災害の復旧、復興活動はまだ緒についたばかりですが、地元のみなさんは“自分たちの街は自分たちで再生させたい”思いでがんばっています。低地帯に住む私たちに多くの教訓を与え続けています。支援と連携をお願いします。

2013年度は、被災地との交流、子ども会議も予定されています。輪中会議を軸に、これからも地域とともに、闊達な活動を心がけ次世代へ繋げ、持続可能なまちづくりを希求していきたいと思えます。皆様の積極的な参加をお待ちします。

ホームページもリニューアルしました。ニュースのバックナンバーも見ることができます。

忙しい日々ががんばって記事を書いてくださった皆様、協働ありがとうございました。

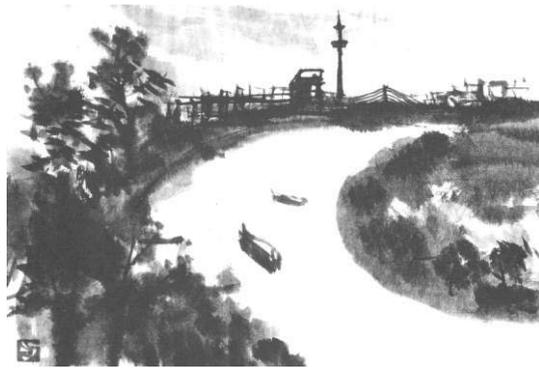
2013・6・15 渡邊喜代美



特定非営利活動法人

「NPO ア！安全・快適街づくり」

〒124-8535 東京都葛飾区西新小岩三丁目5番1号
電話 / FAX 03 - 3696 - 7480
ホームページ : <http://www.banktown.org/>



NPO 法人 ア!安全・快適街づくりニュース
2013・06